

牧師、バイカー、鮫職人として。。。シェア from LA 第33話 コロナ、ロックダウン、妻の事故 ⑥「激突！」

思いがけず始まったガブリエルへの伝道。ここらでそろそろ祈りに入ろうかと考え始め、視線を彼の顔から前方に移し何気げなく前を見た瞬間、ドカッ！！と物凄い音がした。何とクライスラーのバンが、妻が乗る私の愛車マスタングに左後方から猛スピードで追突し、そのまま左周りで強烈にスピンしながら右側合流車線へと押し出されガードレールに激突して止まった。当たったクライスラーも衝撃で左へ旋回して進行方向と逆向きのこちらを向いて止まった。「なに。。。！！」それは一瞬の出来事だった。「ひでえ事故だな。。。」とガブリエル。「あれは俺のカミさんだ！！」妻はすでに現場に到着し路肩に寄せようと減速していたのだ。私は車めがけて一目散に駆け出した。

「ああ、こういうことだったのか。。。」AAAが来ないことや、壊されたヘルメットなど、重苦しい空気の意味は。しかもそれは私ではなく妻に起こってしまった。サタンは常に弱点を突いて来る。60メートルくらいあるだろうか。走りながらついにこの日が来たと思った。2年前から繰り返し届いた裁きの預言。それはコロナのことだったのだが、預言を受ける者に言えることは、たいていその人は当事者となって苦勞することだ。だから今はダビデのように神の前にへりくだり祈りつつ走る。

それにしてもおかしい。なぜカミさんは車から出ないのか？早く出ないと炎上の危険がある、などと思いつつ車に辿り着いた。見ると燃費リッター僅か8キロの原因である鋼鉄の塊のアメ車の後部がへしゃげてしまい、そのせいで左ドアが“くの字”に曲って飛び出し、オープンカーのソフトトップがめくれ上がり“青天井”になっており、彼女は丸見えですぐに目に飛び込んできたがノックアウトされて気絶していた。車は一発アウトでもうダメだとすぐ分かった。ああ、正によみに落ちた瞬間、フルボトムまで落とされた瞬間だった。

「私を泥沼から救い出し、私が沈まないようにしてください。」

私を憎む者ども、また大水の底から、私が救い出されるようにしてください。」詩篇69篇14節

「おい！大丈夫か！？」必死に祈りつつ彼女の肩をつかみ大声で何度か呼びかけると目を覚ましたが、全く何が起こったのか分からない様子。さらに声をかけながら外へ連れ出そうとしていると、「彼女、大丈夫？」とブレイズヘアの20代の太目の黒人の姉ちゃんが走り寄って来た。「彼女がぶつけられたのを見たから止まったの。ぶつけた相手ドライバーは車の前がペシャンコで中から出られず閉じ込められてるわ。もう警察には電話したから。幸運を祈ってる。頑張って！」と去って行った。「どうもありがとう！God bless you！」と彼女の後ろ姿に礼を言うと、今度は「アンタ大丈夫か？」とやや長めの白髪の白人男性が声をかけて来た。それにしてもアメリカ人はいざと言う時すぐに人助けに動く。大したもんだ。いっぽう現場は事故車の破片が散乱して大渋滞を引き起こし、喧噪のるつぼと化した。長い夜の戦いが始まった。 9-24-2020

